第四章 19世紀ヨーロッパの日本語研究

18世紀にはいると、欧米諸国のアジアへの関心が高まり、日本の周辺にオランダ以外の外国船の来航が相次いだ。それら外国船の来航の目的は、①交易の開始，②領土的野心，③鰹鰤のための捕鰹，①軍事的デモンストレーションなどさまざまなあったが、18世紀後半には、南下政策を採っていたロシアや海洋帝国を目指すイギリスなどの船舶や軍艦が日本各地の沿岸に出現し、交易や飲料水や燃料の補給を求めてきた。19世紀になると、アメリカ、フランスなどの使節などが頻繁に来航し、開国を迫った。

＜当時の外国船来航の記録＞
1771年 ロシア船、阿波に漂着。
1778年 ロシア船、蝦夷地に来航、通商を求める。
1792年 ロシア船、ラクスマン、日本人漂着民光太夫らを伴って来航、通商を求める。
1792年 イギリス船、蝦夷地（室蘭）に来航。
1804年 ロシア使節レザノフ、長崎に来航、通商を求める。
1808年 イギリス船、フェートン号長崎に入港、長崎奉行松平康英、引畳自害。
1816年 イギリス船、琉球に来航、通商を求める。
1817年 イギリス船、浦賀に来航、通商を求める。
1818年 イギリス商人、ゴールドン浦賀に来航。
1824年 イギリス捕鰹船員、常陸、薩摩に上陸、飲料水や薪を調達。
1825年 幕府、異国船打払令施行。
1837年 アメリカ船、日本人漂流民を伴い、浦賀に入港、幕府打払令により摘退。
1844年 フランス船、琉球来航、薩摩藩に限り交易許可される。
1846年 アメリカ使節ビッドル、浦賀に来航、通商を要求する。
1847年 薩摩藩、琉球を開港し、フランス、イギリスと通商を許可する。
1849年 イギリス船、浦賀に来航。
1853年 アメリカ使節、浦賀に来航、開国を求める。
ロシア船、浦賀に来航、長崎に来航、開国を求める。
1854年 日米和親条約締結、日英、日露和親条約も締結。
1856年 米国領事ハリス、下田に総領事館開設。
1858年 日米修好通商条約締結、その後、日蘭、日露、日仏も締結。
1863年 5月長州藩外国船砲撃、7月薩英戦争。
1864年 8月四国艦隊下関砲撃。
フランス公使レオン・ロッシーニ着任。
1867年 幕府、大政奉還・王政復古。

江戸幕府の鎖国政策も上記のような列強の圧力を受けて妥協を余儀なくされ、1854年の日米和親条約（神奈川条約）の締結によって開国が実現した。その後、ヨーロッパ諸国との修好通商条約が締結され、それにつれて欧米諸国における日本に対する関心も高まり、日本語学習がオランダやロシア以外にも急速に広まっていった。

4-1 ホフマンの日本語研究

江戸幕府は、キリシタン禁令（1612年）以来、外国人の日本語学習を嫌い、オランダ商館との通商ももっぱら幕府公認の日本人オランダ語通訳に行わせていた。この政策は、外国人が直接に一般の日本人と交渉し、影響を与えることを避けるためであったと言われるが、1775年にオランダ商館の医師として長崎の出島に赴任したスエーデン人のツンベルグ（C. P. Thunberg, 1743～1828）は、その旅行記にその関の事情を次のように記述している。

通訳は、凡て日本人で、かなりよく和蘭語を喋る。日本政府は出来る限り欧州人が日本語を覚えることを妨げている。それは欧州人には日本のことを直接知らせまいとするのである。

私は慣用語を覚えるのが難しかったけれども、これに辟易することなく、秋の間私のはじき友なる通訳を対手として勉強したが、通訳は私に話すことを教えてくれたのみならず、書くことも教えてくれた。然し通訳及び私の身上の安全を計るためには、この授業は秘密でなければならなかった。（『ツンベルグ日本紀行』山田珠樹訳 聖教社 1938年 p.36, pp.272-273より）

※引用文献は適宜、通行の表記にあらためた。

このような幕府の政策もあって日本国内での外国人の日本語研究は、ロドリゲスの時代に比べて大幅に衰退し、むしろ、ロドリゲスなどの著書による日本語研究がヨーロッパにおいて命脈を保つてきていた。幕末期には幕府の禁令が弱まったことやヨーロッパ諸国での日本に関する関心の高まりもあってオランダ商館関係者の日本研究が行われ、上記『日本紀行』やケンペルの『日本誌』が刊行され、さらにシーボルトの日本関係の各種資料が持ち帰られた結果、研究が一層推進された。

これらの資料を研究してヨーロッパの日本学を飛躍させたのは、ホフマン（J. Hoffmann, 1805～1878）であった。ホフマンは、オペラ歌手を志していたが、1830年、25歳のおりにベルギーでシーボルトに出会い、アジアの小国日本の話に親し、大いに興味をそそられ、シーボルトの助手になることを決意し、日本研究の第1歩を踏み出した。

ホフマンは、シーボルトが日本から持ち帰った民俗学や博物学的な資料の整理に従事し、日本に関する知識を深めるとともに日本語を学び、さらに中国語、朝鮮語も学習して、それらの知識を活用して、その頃ヨーロッパで台頭してきた比較言語学的方法で日本語の分析を行っていたとみられている。

—(2)—
1833年には、ホフマンはシーボルトと共著で、『日本書誌』(Bibliotheca Japonica) を刊行し、1851年にはヨーロッパ最初の日本語学講座がオランダのライデン大学に開設された際には、その実力と知識が買われ、最初の日本語学教授に任命された。

ホフマンは、さらに幕末期にオランダ商館の商館長を務めたクルチッス (D. Curtius, 1813–1873) が出島に在任中にオランダ語通訳名村八右衛門の協力を得てまとめた『日本文法試論』の草稿に改訂、補筆し、1857年にライデンで出版した。同書は長崎地方の庶民のことをた取録し、会話練習、通訳訓練にも役立つ、実用性と学術性を兼ね備えた画期的な日本語指導書であったが、クルチッスが言語研究者ではなくこともあって、文法説明や文法分類などにおいて誤りも散見され、ホフマンはこの編集作業を通してそれらを訂正し、時に削除して完璧を期したという。従って、『日本文法試論』は、クルチッスの著作ではあるが、随所にホフマンの理論や見解が補筆の形で記述されているのである。

参考資料 1
クルチッス『日本文法試論』のタイトルページ（左）、序論（右）

(『西洋人の日本語研究』杉本ひとむ著、八坂書房 1999年 p.329より。以下参考資料出典は同書による。)

ホフマンは、日本を訪問したことなく、もっぱら先人の研究書を通じて日本語を学んできたが、1862年に幕府からオランダへ派遣された留学生、覆水戸揚や西周らからはじめて生きた日本語を学んだという。1867年にはオランダ政府の委嘱によってオランダ人の日本語学習用教材『日本文典』(Japansche Spraakleer) を刊行したが、ホフマンの『日本文典』は、数多くの先行研究を踏まえ、さらに自らの研究を加えて従来にない新しい日本語文法を展開している。同書は、オランダ語版と英語版でお出版され、1877年にドイツ語版が刊行され、ローラーパの日本語学習に大きな貢献をなし遂げた。

品詞の分類は、 Yöroopaでロドリゲス以来、伝統的に行われていた8分類（8品詞）方式が採られている。特にホフマンが重視していた「動詞」の下位分類などもロドリゲスの『日本小文典』のそれを参考にしたものと思われる。

屈折語系のヨーロッパ言語の人々にとっては、動詞を語根と活用語尾に分け、語根を基本形とする方が理解されやすいので、ロドリゲスもホフマンも日本語の動詞の「連用形」を基本形とし、辞書などの提示形（辞書形）としていることが多い。

このようなホフマンの研究は、クルチッスの『日本文法試論』やその後の自著の『日本文典』などによって他国の日本語学習者たち、アストンやチェンバレン（ともに後掲参照）にも大きな影響を与えている。

—(3)—
4-2 ホフマンの日本語の音声研究

ホフマンは、日本語の音声を文献的に研究していたが、文献資料を詳細に検討し、さらに論理的な考察を行っているので、すでにクルシツの『日本文章論』改訂に携わっていたころから、日本語の発音に関する綿密な研究に取り組んでいたと思われる。さらに、後年には、前述したとおり、オランダ留学の履歴武揚ら日本人の音声研究に携わり、またヘベセンの著作なども研究したとも言われ、その研究はより深層なものとなっていた。ホフマンの研究には、『日本文章論』の中でホフマンの記述したような例がみられる。

①ガ行音の研究

日本語の「ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ」について、地域による違いを指摘している。

<table>
<thead>
<tr>
<th>ガ行音の発音</th>
<th>西日本・九州地方</th>
<th>東日本、特に江戸</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>特徴</td>
<td>鼻音化せず</td>
<td>鼻音化する</td>
</tr>
<tr>
<td>英語との対比</td>
<td>giveの‘g’と同じ</td>
<td>singingの‘ng’に類似</td>
</tr>
</tbody>
</table>
これなどは、ヘボン（次章参照）の研究を採用した可能性もあるが、後の東京弁にみられる語頭の
音は、鼻音化せず、語中の
音ののみが鼻音化するという点には、触れていない。

② ハ行音の研究

日本語のハ行音は、古くは「p音」であったとか「f音」であったという研究は日本人の間で
も、またロドリゲスなどイエズス会の宣教師の間でも取りざたされていたが、ホフマンもこれにつ
いては、このハ行音を本来「両唇音的摩擦音」（= f 音）として捉えているが、これも地域によって
異なることを指摘している。

<table>
<thead>
<tr>
<th>ハ行音の発音</th>
<th>京、近畿、讃岐地方</th>
<th>江戸・東日本地方（除く仙台）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>特徴</td>
<td>両唇音（= f）</td>
<td>喉音（= h）</td>
</tr>
<tr>
<td>例：「人」、「花」</td>
<td>fito / fana</td>
<td>hito or shito / hana</td>
</tr>
</tbody>
</table>

これらは、桝本武揚らオランダ留学生の発音を直接に観察したものと思われるが、f 音的に発音
される「フ音」についての特別な記述はない。ただ、f 音や h 音が語中では、w 音（唇音）に変わ
ること（kahal[川] → kawa, kuha[楽] → kuwaなど）も指摘している。

③ 日本人の R と L の研究

現在でも、日本人は英語の学習などにおいて R と L の使い分けが不得意であるが、これはすべ
く欧米人が来日するようになってからすぐに指摘されるようになった。ホフマンも『日本文法試論』
においてオランダ商館長の梅田（Meijian）の説（出典不明）を引用して、「日本人の耳は R と L
を区別する感受性がない」と述べているが、この点でも日本人のオランダ留学生たちの発音から確信
を得たようである。

ホフマンは、この他にも、日本語の発音に関してさまざまな考察を行っている。

4－3 ホフマンの古典研究と語源論的考察

文献を中心に進められてきたホフマンの日本語研究は、やがて古典の研究、語源の研究へと発展し
ていた。来日することなく、このような研究が可能であったのは、当時のオランダにはシーポート・
コレクションをはじめ、長年にわたる日蘭交流を通して、歴代商館長、随行医師たちなどがもたらし
た日本関係資料が豊富に蓄積されていたからである。また、ホフマンの日本語研究には、19世紀のヨー
ロッパの言語学的研究方法の発展も大きな支えとなっていたとも思われる。言い換えれば、ホフマ
ンの研究は、近代言語学的精神と比較言語学的的研究手法によって日本語という極東の小国の言語を
はじめて科学的に分析、研究した画期的な研究であるといえる。

比較言語学的な研究においては、日本語の起源や系統を明らかにする必要があり、そのためには、
古代日本語の研究が欠かせないものになる。ホフマンが研究した古代語資料は、以下の歴史書などが
中心であったが、これらはすべて漢籍や日本式の漢字表記であったためにその解釈、分析には漢文読
みの知識や万葉仮名、真字などの知識の獲得を要し、大変な努力が求められたものと思う。

＜ホフマンの古代語研究資料＞
① 先代旧事本紀（いわゆる旧事記）
② 古事記
③ 日本書紀
ホフマンは、これらを解読するために次のような古代日本語の辞書や参考資料を使用していた。

①和名鈔・源順著
②儒訓集・谷川太清著
③和漢三才図会・寺島良安著
④雅言集覧・石川雅望著
⑤雅言仮字格・市川孟彦著
⑥和漢音詠書言字考・槇島武昭著 など

このような研究から、ホフマンはさまざまな日本語の語彙レベルの語源の考察を行っている。ホフマンの語源研究については、杉本透と氏は次のような例をあげているが（『西洋人の日本語研究』p.377参照）、この語源研究にはかなり独断的判断が見られる箇所もある。大変な労苦を重ねて、古代日本語の意味や用法を解明しましたことは重要な成果であるが、さらに、語源まで推論を進める必要があるのか疑問を感じる。

①「居 オリ」
イ（i）か手（wi）から派生。イ・手は座席、すわることで、この継続形がオリで、居住するの意という。

②「有 オリ」
イ（息）から派生（居のイとは別）。継続を意味する。〈継続動詞〉の一つというわけである。イは母音調和でアまたはオとなる。イの屈折形がオリである。日本人は彼らが継続動詞をもっていないから、それに気づいていないという。したがって、イとオリの間に結びつきのあることをしかないとのべている。

上例のイの説明はいろいろな箇所に現われるが、その理由は示されていないので、根拠については不明である。

③「賜 タマフ」
古語で与えるの意のタピとアピ（合）とが複合して、タピ＋アピ→タマピとなった。しかし日本人をこれを玉（宝石）に適合させている。

この例に関しては、前出杉本氏も「別に日本人がこう考えているわけではない、指示に＜玉フ＞などあえるにすぎず、むしろ日本人も完文と認識しているのである」としているが、この例も独断的であると思われる。

ホフマンの日本語研究は、多大な努力と天才的分析能力で研究を推進し、ヨーロッパの日本語研究に大きな足跡を残したが、語源研究には疑問が残る箇所が多い。一(6)
4 - 4 フランスの天才的日本語学者、ロニー

18世紀の後半からフランスでも東洋研究が始まり、19世紀までには中国学が盛んになり、優秀な中国学者が輩出した。1823年にパリにアジア学会が誕生し、日本に対する関心も高まってきて、1825年にはランドレス（C. Landresse）によってロドリゲスの『日本小文典』のフランス語訳『日本文典』が刊行された。

レオン・ド・ロニー（Léon de Rosny, 1837－1914）も当初、東洋語学校で中国語を学んでいたが、中国語学習の過程で日本語にも接触することになり、ランドレスの『日本文典』やシーベルトの『四体千字文』などで日本語を独学で学んだ。ロニーは入手可能な日本語文献を精力的に学習し、1854年には弱冠17歳で日本語学習書『日本語学習に必要な基礎知識の要約』を刊行し、さらに1856年には『日本語研究序説』を出版するに至った。ロニーが初めて生の日本語に触れたのは、1862年の幕府の竹內下野守ら遣欧使節団の接待係兼通訳に任命された時のことで、使節団と行動を共にしながら日本語をブラッシュアップしたというが、一行の中では福沢諭吉、松本弘安と親しく交際していた。

この時代のフランスは、ナポレオン3世の治世下にあり、かつての栄光を取り戻すべく、積極的な対外進出を目指していた。1860年には、英国との連合軍が北京を占領し、北京条約を締結し、中国進出の足をかけたり、1862年には、コーチシナに軍隊を派遣し、第一次サイゴン条約を結び、コーチシナの一部を領有するなどアジアへの関心が高まっていったので、フランスでも日本語が関心を集め、日本研究、日本語研究が発展していった。

ロニーは、精力的な多岐にわたる研究によって次のような数多くの日本語関係の著作や論文を残している。

①『口語・文語日本語入門要』 1854年 パリ
②『日本語研究序説』 1856年 パリ
③『日仏英辞典』 1857年 パリ
④『日本語とアジア大陆諸語との関連性』 1861年 パリ
⑤『ゴシケシュッによる和儒辞典についての報告』 1861年 サンクトペテルスブルグ
⑥『日本の百科事典－和漢三才図会の土俗学註記』 1861年 パリ

参考資料 3
ロニー『日本語考』の日本語（左）および仏語（右）のタイトルページ

（前掲書 p.427より）
ロニーは、上記のような日本語教育関係の著作、論文の他に、『古事記』や『日本書紀』の部分訳や関連した研究論文も発表している。1871年に刊行した『日本詩選・詩歌撰集』には、『万葉集』や『百人一首』などからの詩歌が日仏対訳で書かれ、さらに注釈が施されていた。

参考資料 4
ロニー『日本詩選・詩歌撰集』
タイトルページ（左）と本文、
〈和歌集目録〉の冒頭（右）

4－5 ロニーの日本語研究
ロニーの著書『日本語考』は、当時のヨーロッパで入手できる日本語に関する情報を網羅した内容になっていった。その目次は以下の通り。

1）序
2）本文
①日本語の起源
②日本語と琉球語の系統比較
③表記方式 万葉仮名・平仮名・片仮名、日本語の音節や発音、書道・筆の持ち方
④日本語文法（名詞、形容詞、数詞、数量詞、代名詞（人代名詞、所有代名詞、関係代名詞など）、動詞、助動詞、副詞、後置詞、接続詞、関係詞、一文字の概要）
第五節

日本語学書

第七節

片仮名・平仮名のこと

第八節

くずし字の書き方、漢字紹介付索引、若干の仏教語、図版7点（日本の漢和辞書－節用集の原本の見本）、平仮名（変体仮名）表など

ロニーは、1863年からパリ東洋語学校に開設された無料公開講座で日本を教えていたが、1868年に日本語講座が正規コースになったのを機会に正式な日本語教授に任命された。ロニーはこの講座の教材として20巻となる『日本語実用教科』を作成し、フランスの日本語教育の基盤を築いた。

ロニーは、フランス人に学びやすい日本語を目指して『日本語実用教科』（Cours pratique de japonais）を著したが、同書の日本語の助詞などの説明では、日本人の研究者のそれとは異なり、フランス人に受け入れられるやすい方法を工夫していたと思われる。例えば、動着語の日本語の助詞を自立語に付着する機能語として扱わず、一種の屈折語における格変化として教える方針を採っていたとも思われる。

<table>
<thead>
<tr>
<th>格</th>
<th>格変化</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>主格 (Nom.)</td>
<td>ヒトハ</td>
</tr>
<tr>
<td>属格 (Gén.)</td>
<td>ヒトノ</td>
</tr>
<tr>
<td>与格 (Dat.)</td>
<td>ヒトン</td>
</tr>
<tr>
<td>対格 (Acc.)</td>
<td>ヒトヲ</td>
</tr>
<tr>
<td>奪格 (Abl.)</td>
<td>ヒトヨリ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

このロニーの説明は、動着語である日本語の「名詞＋助詞」の構造を無視して、ヨーロッパ諸語の格変化的文法に引きずられて「格変化」として紹介していたと解釈する向きもあるが、ロニーの古代語からの本来の現代語にいたる深い造語からして『日本語実用教科』で便宜的に、つまりフランス人学習者に理解しやすく、しかも日本語使用の面で実用があるわけではないので、このような解釈を行ったとも考えられる。

このようなロニーの活躍によって、フランスの日本語教育、日本研究が長足の進歩を遂げたことは事実であり、ロニーはフランスにおける日本学の最大の労力者の一人であるといえる。

第四章 参考文献

沖森卓也編 『資料 日本語史』おうふう 1991年
杉本つとむ著 『西洋人の日本語研究』八坂書房 1999年
関正昭著 『日本語教育史』スリーエーネットワーク 1997年
木村宗男著 『講座日本語と日本語教育』第15巻 明治書院 1991年

（たかみざわ はじめ 日本語日本文学科）

(9)